

評論

山本周五郎

尾崎秀樹

評論 山本周五郎

一九七七年七月一〇日第一刷發行

著 者——尾崎秀樹

發行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

發行所——株式会社白川書院

東京——東京都新宿区左門町三一四 ☎〇三—三三三—三三四四

〒一六〇 振替東京九—一七六四五〇

京都——京都市左京区北白川追分町八七 ☎〇七五—七八一—三九八〇

〒一六〇六 振替京都九二二

© H. Ozaki

評論 山本周五郎

評論 山本周五郎／目次

第一部 山本周五郎とその時代

- 一 その文学の本質 7
- 二 甲州の山河——生い立ち 13
- 三 山本周五郎との出会い 19
- 四 須磨と浦安 26
- 五 大衆文学の世界へ 32
- 六 馬込時代 37
- 七 間門園での仕事 43
- 八 死とその前後 49

第二部 山本周五郎とその文学

- 一 政治との距離 57
- 二 「女性」像の位置 67
- 三 「おもしろさ」の構造 77
- 四 『縦の木は残った』の歴史的位置 87
- 五 『山彦乙女』と甲府の風土 93
- 六 虚と実のあいだⅡ『正雪記』 99
- 七 『日本婦道記』の意味 106
- 八 平手深喜の青春Ⅱ『花と刀と』 112
- 九 『菊屋敷』その他 118
- 一〇 初期作品の諸相 122
- 一一 “御定法”の外に―『五辨の椿』の意図

一二 赤ひげの時代 139

一三 山本周五郎文学の魅力 154

一四 山本周五郎の歴史観 162

第三部 その周辺をさぐる

一 ながい坂を歩む―『青べか物語』『ながい坂』 179

二 その文学的ひろがり―劇化映画化作品にふれて 186

座談会 山本周五郎の人と作品 201

すれちがい―あとがきにかえて 245

第一部

山本周五郎とその時代

一 その文学の本質

山本周五郎には虚実とりまぜてさまざまなエピソードが伝えられる。今井達夫との間に大衆文学についての論議がかわされ、なぐりあいの喧嘩をしたあと、これからは大衆小説だけ書いてゆくと宣言したといわれるのも、そのひとつだ。山本周五郎は回想している。

「今井達夫は私よりはるかにおとなであって、まあそう云うな、となだめ、それではあまりに興がないじゃないか、と云った。私はそこでまた答えた。大衆小説は書くが、やがてはその中で自分のやりたいことをやるつもりである。同じ小説で講談雑誌へ出しても改造や中央公論へ出しても、少しもお

かしくないもの、そういうものを仕上げてみるつもりだ。こう書いてみると、恥ずかしくて背筋がぞくぞくするけれども、これは事実であつたばかりでなく、私にこういうことを宣言する機会を与えてくれた点で、改めて今井達夫に深い恩恵を感じるのである」(すべては「これから」)

山本周五郎が今井達夫と知りあつたのは昭和五年頃のことだ。今井はわずかの間ではあつたが、博文館から出ていた「少女世界」の編集者だつたことがある。同じ社の「譚海」という雑誌の編集長だつた井口長次の紹介で、二人の交渉ははじまつた。偶然ではあつたが、今井は山本周五郎が「春は又丘へ」という作品で、東京市の募集した児童映画の脚本懸賞に入選しており、同時に賞を得ていた。そのようなことも二人の交友をふかめる理由となつたのかもしれない。

二人は銀座で落ちあつた。夏の暑い最中で、日はすこし傾きかけていたが、今井が尾張町の交差点までゆくと、山本はバス・ストップの前に立つて翻訳ものを読んでいた。和服の着流しだつたようだが、一ぱい飲もうということになって、どこかの小料理屋へ入つた。対人関係では神経質などころのある山本は、つきあえるかどうかを酒席で判断するつもりだつたのかもしれない。

今井達夫は三田出身の作家で、すでに「三田文学」その他に短篇を発表していた。山本周五郎はそれ以前にも「少女世界」に執筆したことがあり、あらためて今井を紹介される必要もなかつたのだ。純文学にすすむ意図を抱いていた当時の彼は、今井と知りあうことで、新しい局面をひらきたかつたのかもしれない。それだけの伏線を敷いて考えた場合、はじめて彼の今井との論争が意味をもつてくるのだ。

二人の口争いはマルクスの「資本論」を読んだか読まないかといったふうな話をもつて、最後に山本周五郎一流の執筆宣言に発展したものでらしい。山本は「私にとって今井達夫は文学上の恩人であり、彼から教えられたことはいままなお私の内部でしばしば鞭を鳴らしている」と告白しているだけに、同世代の今井に兄事する思いであり、とくに今井のもつ都会人らしい垢ぬけしたセンスにはひかれていた模様だ。

最初の出会いのときにいさかいをおこしたのか、それともその後の話なのか、いずれにせよ山本周五郎が、同じ作品で大衆的な倶楽部雑誌へ出しても、総合雑誌の文芸欄に出しても通用するような、そんな小説を書きたいと言ったことは、いかにも象徴的な宣言だった。彼のその後の文学の歩みは、それを裏づけてくれる。

山本周五郎の出発点は純文学であった。しかしその後いろいろな事情から大衆ものにすすみ、その分野でのすぐれた書き手となったが、そこに安住する気持はなかった。むしろどのようなコースをとるにしても、ゆきつくところは同じだという決意が、彼の内心に牢固としたものをつくっており、それが年とともにつよまっていった。彼のながい作家としての年輪を詳細に眺めてみると、一作ごとに新しい分野をひらこうとした努力が感じられる。とくに横浜中区の本牧に移ってからは、文壇的なつきあいもことわり、俗世間との交渉もできるだけ絶って、ひたすら創作にうちこんだ。文学の鬼という言葉があるが、彼は憑かれたように創作にしがたい、生活のすべてを創作中心にくみ変えた。その意味では、彼は生きることと文学に従うことを、ひとつのものに融けこましている。それはおそらく

きびしく哀しい自己との闘いであつたが、喜びもまたその中から生まれた。

彼は書いている。

「或る主題について『書かずにいられないもの』があるとすれば、それはその作者にとって発見であり、他のいかに偉大な作者にも及ばない独自の価値がある筈である。もちろんその『価値』は主観的なもので、それがまさしく表現されて初めて客観的な価値判断の対象となるだろう。私はむしろいいことは知らない。芸術性などということは本当はどっちでもよいので、その小説に作者の『書かずにいられないもの』があり、読者にもう一つの生活を体験したと感ぜさせるくらいに、現実性のある面白さがあれば上乘だと思う」（小説の芸術性）

作者にとって書かずにいられないものを書くことが、小説のねらいであり、芸術性などということとはどちらでもいいことだと、ズバリ言つてのける山本周五郎の言葉の裏には、文学に賭けた男の決意が秘められていた。

しかも彼の文学の魅力は、そういったひたすらなものにささえられた庶民性、現代性にあり、それらが計算された技法のひとつの像を形づくっている点では、他の追隨を許さない。

彼は昭和三十六年五月に中央大学での文芸講演会で、つぎのように語つたことがある。「文学の場合、慶長五年の何月何日に、大阪城で、どういふことがあつたか、ということではなくて、そのときに、道修町の、ある商家の丁稚が、どういふ悲しい思いをしたか、であつて、その悲しい思いの中から、彼がどういふことを、しようとしたかということを探究するのが文学の仕事だと私は思います」

慶長五年というのは関ヶ原合戦の年である。その年のある日ある時、大阪城でどのようなことが行われたかが、文学の場合重要なのではなく、むしろ道修町の商家の丁稚がどんな悲しい思いをしたのか、その悲しみの中から何をしようとしたかを究めるのが第一だというこの言葉ほど、彼の文学の本質を吐露したものはない。

山本周五郎は英雄を好まなかった。明智光秀や徳川家康には関心をもったようだが、それもいわゆる英雄的な側面からではない。人間としてとらえ、描くといった発想が、ゆるがない視座をつくっている。彼が描いた作品の主人公の大部分は、下級武士か社会の下積みに生きる市井人であり、そこに限らない共感をしめしている。権力によって庇護されることのない庶民たちは、いつの場合にも被害者でこそあれ、陽のあたる場所にはおかれなかった。政治からも法律からも、ときには道徳からもかまってももらえない人々は、自力で生きていくしかない。彼らが最後の抛り所にするのは、おたがいどうしの信頼と愛なのだ。山本周五郎はその部分に眼をそそぎ、疎外された市井人や封建武士の哀歓を描くことで、独特な世界を作りだし、抒情的な高みへと作品をねりあげていく。その方法は彼だけのものであり、なまじ現代を語らないだけに、かえって時代を超えた大衆的共感を培うことになるのだ。彼はしたしくその日常に接した木村久邇典にむかって、津軽出身の作家、葛西善蔵の生きかたにふれ、つぎのように語っている。

「きみ、善蔵はね、いいことを言っているんだ。『こころ急ぐ旅ではない』。泡をくったってはじまらない。ぼくもジツクリやりますよ。ますます脂っこく、もっともっと息の長いものを書く。ぼくは

戦前までは、あまりに人間の精神的な面に重点をおきすぎたようだ。人間は精神と同時に肉体の所有者でもある。生殖器の持主であり、放屁もすれば排尿し脱糞もする生き物であることに目をつぶってはならないという大事なことを、戦後になって気がついたんです。どんなに美しい佳人でも便所のない家に住み続けることはできないだろう、醜惡な面も、全部ふくめたものが人間だ。そういう人間に四つに取り組むのが小説だということに気がついたんです。年にしては遅い発見だといわれるかもしれないが、わたしはオク手のほうだもんだから、そんなことはちっとも気にならない。まあ、ぼちぼちやってくつもりです」

よさも悪さも両方をふくみこんだものが人間であり、そういう人間と四つに取り組むのが小説だというのは、彼の中期以後の文学觀を端的に物語っている。机の上だけの仕事をきびしくいましめ、実のともなわれない仕事を極力避け、人間を描くことを作品の中軸にすえたところに、彼の基本的な姿勢がある。これは作家として当然な態度だが、そのごくあたりまえなことがなかなか実行されないのが実情だ。山本周五郎は文学即人生の意識にたち、それを実践した作家だった。

人間山本周五郎については、人により、ふれあった時期により、評価がかなりくい違っている。さびしがり屋でシャイで人なつっこい人だったという者もいれば、ヘソまがりで頑固で人間嫌いだったという者もいる。そのいずれの評価もあたっており、また多少ずつずれているというべきだろうが、そのふたつの面が同居していたというよりも、さびしがり屋でシャイで、ややみえっぱりで多少ダンディなところのある彼が内核をなし、そのあらわれが相手によってときにヘソまがりにも、人間嫌い

にもうつるといふのが、彼の性格だったのではないだろうか。その奇行ぶりも今ではなかば伝説化している。しかしそれも山本周五郎の作家的執念の影だったといえよう。

二 甲州の山河——生いたち

山本周五郎は明治三十六年六月二十二日に山梨県北都留郡初狩村八二番戸（現在の太月市下初狩二二番地）の奥脇賢造方の長屋で生まれた。本名は清水三十六。逸太郎ととくの長男である。三十六という名前は奥脇賢造の養子にあたる愛五郎が、三十六年生まれということに命名した。

奥脇家は村長などをつとめたことのある土地の旧家で、その屋敷は御堂屋敷とよばれていた。清水家は奥脇家の長屋に住んでいた曾根勘十郎という蕎麦の仲買人の世話で、祖父伊三郎の代に本籍地の韭崎からそこへ移り、長屋の一軒を借りて住んだ。奥脇家の長屋は十数戸あった。清水家はその奥まった一角で、奥行四間、間口四間余の自家の二階建てだった。

周五郎はこの家に三つのときまで住んだ。そして家庭の事情で、明治三十九年六月には祖母さくの

実家のある北都留郡広里村（現在・大月市）へ父母とともに移った。あとには祖父母と父逸太郎の弟妹にあたる衆次郎とせきが残った。そして明治四十年八月二十五日の山津波で家とともにおしつぶされてしまった。

この明治四十年八月の水害については、奥脇愛五郎の詳細な記録が同家に保存されている。それによると八月二十五日午前七時頃、長雨にゆるんでいた寒場沢の一角が大きくえぐりとられ、下宿部落と中九部落の家屋五十余戸が埋没し、三十余名の死者が出たという。三十六親子は難を免れたわけだが、祖父伊三郎（四十九歳）、祖母さく（四十四歳）、叔父衆次郎（十四歳）、叔母せき（十七歳）は一瞬にして命を奪われた。

三十六親子はその知らせを受けてすぐ初狩へもどったが、見なれた風景は一変し、あとには瓦礫と泥土だけが無残に残されていた。三人の遺体はまもなく発見されたが、祖母さくだけはなかなかみつからなかった。翌年の二月になって、やっとかなり離れたところから掘り出された。全部の遺体が共同墓地に埋葬されたのはその後のことである。その間三十六親子は初狩に仮寓していた模様だが、幼い三十六少年の胸にも、この事件はつよい衝撃となって残った。一家の者も後始末を終えた後は初狩を去り、ふたたびその地にもどらなかつた。呪わしい思い出のある初狩の地を捨てることによって、思い出そのものをも閉ざしたかったのだらう。

山本周五郎は生前出生地について語ることを意識的に避けていた。本籍地の北巨摩郡大草村若尾（現在・韮崎市）が出生地として誤り伝えられたのもそのためである。出生地が明確になったのは、彼

の死後一年を経た昭和四十三年春のことで、山梨県塩山商業高校の文芸部員が戸籍関係を調査し、初狩が出生地であることをつきとめた。私もそれまで山本周五郎の出生地を大草村とし、そのように書いてきただけに、この共同研究のレポートを一読して、調査のいたらなかったことを恥じたものだが、なぜ山本周五郎が生前、初狩の生まれであることを秘めていたのかという疑問は依然として残った。幼少時に経験した悪夢のような事件を思い出すまいとする気持が、いつとなく出生地を本籍地とすりかえるようにさせたのではなかったか。

山本周五郎は生前、甲州人氣質をあまり好まなかったようである。おそらく彼自身のうちにひそむ甲州人氣質をつよく意識したためであろう。そのせいかどうか、郷里の山梨について直接的にはほとんど語り残していない。わずかに戦後執筆した長篇『山彦乙女』の中で、初狩周辺の自然と韭崎界限の山河をひとつにとけあわせたような形で、象徴的に語っているのだ。この長篇は武田家の再興をはかるみどう家の陰謀を主軸に、みどう家の花世と安倍半之助の恋を描いた伝奇小説だが、その中で「寒場沢に近寄るな、近寄ると必らず凶事が起る。今まで沢に入った者で、生きて帰ったものはない」と述べたくだりがある。山本周五郎にとって、寒場沢という言葉は、痛ましい思い出にそのままつらなるものがあつた。

木村久邇典が山本周五郎の直話として書きとめたところによると、山津波の当時、父親の逸太都は商売女とともに東京に駆け落ちしており、子どもを連れて母親がその後を追った直後のできごととされている。その間の前後関係はなかなかつかみにくい、山津波の惨事と父の情事とがかさなりあっ